鹿児島県立鶴丸高等学校広報紙

第１２１号　H29．１１．１５

好学愛知
自律敬愛
質実剛健

鶴信

鹿児島県立鶴丸高等学校
〒890-8502　鹿児島市薬師二丁目１番１号
TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

変化の時を迎える人として

進路指導課主任　平山拓磨

もう半世紀を超えて生きたせいか、懐古的回想に耽る時間が多くなった。例えば、体育会系の根性主義が通用しないとか、勧善懲悪的ドラマがほとんど見られないとか、正義の味方の描き方も随分変わってきたとか考えることだ。白黒はっきりした物事の描き方が敬遠され、優柔不断な主人公が「悩み」の果てにわずかな光明を見出すフィクションが流行する。社会的善悪の絶対性は存在せず、大半が相対化され、相手に正解を出させるスタンスをとる風潮が広がっている。効率が、コストパフォーマンスが、そして便利さが何より重視され、いつ芽が出るかわからない努力の継続や、じっと耐えて待つことはもはや美徳ではない。答えを素早く出せることや、そのノウハウだけの習得を求めようとする者は後を絶たず、目的が不明瞭なままでも、目先の結果を出すことが人生の成功であるかのような価値観が社会を支配する。目的と手段の整合性は、個の感覚に左右されるのである。

生徒に「古文や漢文はどうして学習しないといけないのですか？」と問われる。私と違う「立派な」先生は「温故知新の意味を……」とか「多様性の中に潜む真理の追究とは……」とかを丁寧に教授するかもしれない。それでも私は「そんなの自分で考えないと」と答える。すべての真理は自分で追究しないと納得なんかできないと思っているからである。でも、本当の理由は別にある。学校で教わる教科書の内容は、先人の努力の結晶であり、ある種の真理を究めた者たちの系譜である。それを辿り身に付けることは、さらなる真理を追究するための土台作りであり、それ無しに新たな創造は為し得ない。不断に構築される知の土台を重ね続けようとすることこそが、永遠に変わることのない高校生の学びの意義なのだと教師として信じているからだ。

高校教育も変革の時を迎えている。その変革は方法論として間違っていると、異を唱える人も少なくない。私自身も、理念として、方法として、目指しているものが正しいのかどうかはわからない。しかし、「今」を生きる私たちが、その社会をすばらしいと思わないのなら、変革をある意味で受け入れ、未来の社会のために何らかの「結晶」を作る努力を怠ってはならないのではないだろうか、と考える。私たちが日々学び、思考し、研鑽することは、自己の完成を期して努力することで適う未来への知の蓄積であるはずなのだ。

慶応三年に生まれ、江戸から昭和の時代まで生きた文豪幸田露伴は、娘である幸田文に、昭和へと世が移る時に「変化は大いに結構。ただそこには変化しないでいることの倍以上の労力が必要だ。その覚悟がなければ……」と告げたそうである。一八一七年以来の生前退位が行われる「平成」を生きる私たちは、まさに「世」の変化に立ち会う、未来創造の担い手であるはずだ。高校生として、一人の人間としての私たちが、短絡的な現状への欲求により真の成長の手を止めることは、次世代の学習者に対する怠惰であり、無責任な行為である。真理追究のための変革の努力、工夫と、揺るぎない学問追究の姿勢の構築は普遍的真理であるはずだ。それをいかに具体化するかは、個々が相応するものを追求すべきだろう。その覚悟と努力は決して無駄ではないし，そうしてはならない。

芋虫は蛹になり蝶へと変態するにあたり、その中身が細胞レベルで分解され、次世代を作るのに適した姿に再構成されるという。私たち人間はいつが成虫であるのかわからない。でも、自分のためだけに生きるのではないからこそ、その外観は変わらずとも、内部はゆっくりと、かつ激しく変化していくべきなのではないだろうか。その苦悩の先には、必ず求める真理が存在し、そこで大きく羽ばたけると信じながら……。

今日も悠学ルームでは、早朝・放課後に黙々と自学自習に励む生徒の姿が見られます。

接戦を制し、二年生優勝
三年・一年も大健闘を見せる
～第六十九回　体育祭

未だ残暑が厳しい九月九日土曜日、第六十九回体育祭が本校グラウンドで行われました。今年のキャッチフレーズ・サブタイトルは、「凜　～　煌瞬を脳裏へ刻め～」。考案者は、キャッチフレーズが濵砂さん（３２Ｒ）・益満さん（３６Ｒ）、サブタイトルが國見さん（２４Ｒ）・宮内さん（２４Ｒ）です。今年は直前の練習期間に雨が続き、予行も急遽、木・金の二日間に分けての実施となりました。短い準備期間ではありましたが、そこは集中力に勝る鶴丸生。生徒会や応援団を中心に、一致団結して準備や練習に当たります。

当日は照りつける太陽の下、各学年の意地と名誉を懸けて熱戦が繰り広げられました。三年生のスウィートメモリー（フォークダンス）や一・二年生のマスゲーム、応援団の演舞が華を添える中、各競技では熱戦が展開されました。今年度から内容がリニューアルされた種目もあり、「スーパーガール」では五人一組で竹の棒を持った選手が、三か所のコーンを回りながらリレーをつなぎ、その速さを競いました。

午前から着実に得点を重ねる三年生に対して、二年生も追い上げを見せます。そこに何とか食い込もうとする一年生。見応えのある接戦を制したのは、青組二年生でした。

当日は多くのＰＴＡ・保護者、同窓会、近隣住民の方々にもご来場いただき、躍動する生徒の姿をご覧いただくことができました。熱中症対策として昨年に引き続きミストファンを設置したり、本館一階の会議室を休養場所として開放したりしましたが、ご好評をいただいたようです。来年も多くの皆様のお越しをお待ちしております。

青空の下で行われた競技の中から、マスゲームの風景。

百鶴繚乱
～第六十九回　文化祭

十月七日土曜日、爽やかな秋空の下、文化祭が開催されました。キャッチフレーズに選ばれたのは２１Ｒ池田宏次郎君の「百鶴繚乱～咲き誇る青春の瞋聞～」。才能豊かな鶴丸生の個性が、色とりどりに咲き乱れる様が目に浮かびます。

前日の準備の段階から展示発表の教室は華やかに飾られ、体育館ステージでは入念なリハーサル・打ち合わせが行われていました。そして迎えた当日。生徒達の溢れんばかりの熱気で、体育館はエネルギーに満ちあふれます。放送部・３８Ｒ大薗碧さんの朗読に続いて、一・二年生のクラス劇、音楽部の合唱やダンス部のステージはいずれも日頃の部活動で培った練習の成果が発揮され、観客から大きな拍手と声援が送られていました。続く書道部のパフォーマンスでは、四人の先生方がスペシャルゲストとして登場し、部員との共演を果たします。演劇部の一年生三人による初々しい演技の後には、恒例の職員による舞台です。今年は三学年の先生方を中心に、中島みゆきの「糸」が歌われ、最後は学年主任の徳留先生による熱いメッセージに、生徒たちが大きな声援で応えていました。また、午後からの吹奏楽部のステージに続いて、今年度は閉会式の際に生徒会によるスペシャルプレゼンツで生徒全員による「世界に一つだけの花」が合唱され、学校全体の一体感を感じながらの終幕となりました。

展示会場も熱気を帯びていたようです。古典研究、芸術研究、科学研究など、キャッチフレーズ通り多彩な研究の成果を、観客のみなさんも興味深げに観覧していました。

ステージ発表から、書道パフォーマンスの一コマ。

１１・１２月の行事予定

		11　月		食堂
13	月	学年朝会	定期教育相談（45分授業）	○
14	火	集団読書（1，2年）		○
15	水			○
16	木			○
17	金			○
18	㊏	悠学講座⑤		×
19	㊐			×
20	月	全校朝会 卒業・中間考査時間割発表		○
21	火			○
22	水			○
23	㊍	勤労感謝の日		×
24	金			○
25	㊏			×
26	㊐			×
27	月	**卒業考査(1日目)**		○
28	火	**卒業考査(2日目)** **中間考査(1日目)**		×
29	水	**卒業考査(3日目)** **中間考査(2日目)**		×
30	木	**卒業考査(4日目)** **中間考査(3日目)**		○

		12　月		食堂
1	金	1・2年クラスマッチ 3年平常授業		○
2	㊏	悠学講座⑥		×
3	㊐			×
4	月	学年朝会	通学マナー指導	○
5	火			○
6	水			○
7	木			○
8	金			○
9	㊏			×
10	㊐			×
11	月	全校朝会 職員会議　45分授業		○
12	火			○
13	水			○
14	木	45分授業		○
15	金			○
16	㊏	悠学講座⑦		×

お知らせ

十一月十四日(火)は、集団読書の日です。

一・二年生の各クラスでＬＨＲ委員が中心となり、一冊のテキストをテーマにして議論が行われます。今回の課題図書はヘンミングウェイの名著『老人と海』です。気候も穏やかになり、読書にはよい季節となりました。秋の夜長に、鶴丸の生徒と同じ本を読んでみてはいかがでしょうか。